




審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1368 号	氏名	中島 紘太
審査担当者	主査	大島 孝一	(印) 
	副主査	川口 巧	(印) 
	副主査	久下 亨	(印) 
主論文題目： Usefulness of Elastica van Gieson staining and the number of samples prepared for venous invasion of colorectal cancer (pT2-pT4) (大腸癌(pT2-pT4)の静脈侵襲における EVG 染色の有用性と標本作成枚数の検討)			

審査結果の要旨 (意見)

大腸癌 (pT2-pT4) の腫瘍部全割での HE 染色標本と EVG 染色標本を用いて予後に影響を与える標本の作成枚数および EVG 染色標本の作成枚数を検討した研究で、100 例の大腸癌 (pT2-pT4) の標本の静脈侵襲の有無を、1) HE 染色標本のみでの判定と 2) それに EVG 染色標本を加えた場合の判定を、2-1) 最大最深部を含む 1 列切片のみを観察した場合と 2-2) 腫瘍部全割面を観察した場合に分けて比較し、結果として、無再発生存期間は HE 染色標本のみでの判定では静脈侵襲の有無で予後に有意差はみられなかったが、EVG 染色を用いた判定では最大最深部 1 列でも予後に有意差がみられ、腫瘍部全割面を観察した場合はその傾向が顕著であった [EVG(deepest): P=0.0128, EVG(whole sections): P=0.0069]。腫瘍部全割面を EVG 染色を加えて観察した場合、静脈侵襲を認めなかった 15 症例は全例観察期間内に再発がみられず、また、Intramural venous invasion 群、Extramural venous invasion 群で予後が層別化される傾向がみられた。審査にあたり、主査、副査からの、今後の展開、また実験系の可能性に対する質問にも的確に回答が得られている。この論文は十分に学位に値するものと考えられる。

論文要旨

静脈侵襲は大腸癌の重要な予後因子であるが、実際の日常診断においてはかなり過小評価されていることが予想される。今回の研究では大腸癌(pT2-pT4)の腫瘍部全割での HE 染色標本と EVG 染色標本を用いて予後に影響を与える標本の作成枚数および EVG 染色標本の作成枚数を検討した。外科的切除がなされた 100 例の大腸癌(pT2-pT4)の標本の静脈侵襲の有無を観察した。HE 染色標本のみでの判定とそれに EVG 染色標本を加えた場合の判定を、最大最深部を含む 1 列切片のみを観察した場合と腫瘍部全割面を観察した場合に分けて比較した。腫瘍部全割面の EVG 染色標本を用いた場合の判定結果とその他の方法での判定結果の一致度はいずれも低かった。無再発生存期間は HE 染色標本のみでの判定では静脈侵襲の有無で予後に有意差はみられなかったが、EVG 染色を用いた判定では最大最深部 1 列でも予後に有意差がみられ、腫瘍部全割面を観察した場合はその傾向が顕著であった [EVG(deepest): P=0.0128, EVG(whole sections): P=0.0069]。腫瘍部全割面を EVG 染色を加えて観察した場合、静脈侵襲を認めなかった 15 症例は全例観察期間内に再発がみられず、また、Intramural venous invasion 群、Extramural venous invasion 群で予後が層別化される傾向がみられた。この研究では大腸癌の静脈侵襲の評価に EVG 染色を加えることで、予後に影響を与える静脈侵襲の同定が可能となり、さらに EVG 染色の枚数を増やすことでより正確な予後予測が可能であった。